

鷹木恵子著『チュニジア革命と民主化 人類学的プロセス・ドキュメンテーションの試み』(明石書店、2016年9月)

The Tunisian Revolution and Democratization : An Anthropological Process Documentation / Keiko TAKAKI

はじめに

2010年12月、チュニジア中部の町シーディ・ブーズィードで発生した民衆デモは、チュニジア各地に広がり、ベンアリー独裁政権への拒絶を示す民主化デモに発展した。ベンアリー大統領は、デモの鎮圧を軍に命じるが、翌年1月、軍司令官の離反を受けて国外に逃亡し、20年以上にわたった独裁政権は崩壊した。

チュニジアでの政変は、同じように、長期独裁政権の下で社会的な不満がうずまいていた他のアラブ諸国にも大きな影響をもたらした。各国で民主化を求める民衆デモが発生し、リビアやエジプトなどでは独裁政権が崩壊した。「アラブの春」として知られる政治的なうねりである。

ただし、アラブ諸国に広がった民主化運動は、エジプトやリビア、シリアなどでは、既存秩序の崩壊によって大きな政治的混乱を招いた。結果として、民主化を目指した「アラブの春」は失敗に終わったととらえられ、無秩序状態や新たな強権政治を生じさせた元凶であるかのように見なされることさえある。

一方、チュニジアでは、ベンアリー政権の崩壊後、議会選挙の実施や新憲法の成立など、紆余曲折を経ながらも民主化の歩みを進めた。2015年には、民主化に貢献したとして「カルテット」と呼ばれるチュニジアの民間団体グループがノーベル平和賞を受賞している。

それでは、「アラブの春」と呼ばれる民主化運動に関し、失敗に終わったとされる国々とチュニジアとでは、何が違っていたのだろうか。

あるいは、チュニジアにおける民主化成功の鍵はどこに求めることができるのであろうか。

チュニジアにおける民主化過程は、図式的に見れば、広範な市民による反体制デモが起き、独裁的な大統領を追放し、その後は、制憲議会の設立と新憲法の制定、大統領選挙の実施という段階的なプロセスである。一見すると、論理的には単純な民主化過程であるようにも思えるが、その内実を検討すると、さまざまな疑問が浮かんでくる。

例えば、チュニジアにおける革命は、なぜ、明確なリーダーが不在のまま、デモが広がり、政権崩壊にまで至ることができたのか。また、民主化プロセスにおいて、なぜ、イスラーム主義政党と世俗政党の間の決定的衝突が回避され、憲法の制定と大統領選挙に至ることができたのか。そもそも、一連の民主化において、他の国ではさまざまな困難に陥ったのに対し、チュニジアではどのようにその歩みを進めることができたのであろうか。

こうした疑問に答えるのが、鷹木恵子著『チュニジア革命と民主化 人類学的プロセス・ドキュメンテーションの試み』(明石書店、2016年)である。同書は、チュニジア革命の背景からベンアリー政権崩壊に至る政治過程、民主化のプロセスについて詳細な動きを記録している。加えて、同書は、チュニジア国内での広範な聞き取り調査によって、市民の目線というミクロなレベルから見た革命と民主化の過程についても記述している530頁に及ぶ大著である。

*中部大学国際関係学部国際学科

同書の内容

それでは、同書の内容について見ていこう。

著者の鷹木氏は、同書について、「チュニジア革命とその後の民主化が、どのような背景や要因のもとに、どのように始まり、そしてどのような展開過程を辿ったのかを、文献研究とまた文化人類学的現地調査による観察記録や多くの人々からの聞き取り資料に基づいて、プロセス・ドキュメンテーションの手法を用いて記述したものである」(416頁)と説明している。

ここで言及されているプロセス・ドキュメンテーションの手法とは、単に、投入(インプット)と成果(アウトプット)、あるいは原因と結果だけに注目して、性急な結論や理論化を目指す研究ではなく、過程そのものに注目して、複雑な事象がどのように展開していったのか、また、その過程でどのような変化や学びがあったのかに注目する研究手法である。

この手法は、チュニジア革命について知る上で最良のアプローチであると思われる。というのも、他のアラブ諸国が挫折する中で、なぜチュニジアでは民主化革命が成功したのか、すなわち、同じ独裁政権下にあった国が同じ民主化を目指しながらも、なぜその帰結が異なったのかを考えるためには、単に原因と結果に注目するだけでは理解ができないからである。政変と民主化の過程で、どのようなアクターが活動し、何が起き、どのような影響を与え合っていたのかに注目することは、チュニジアの政変と民主化を研究する上で不可欠であろう。

さらにいえば、チュニジア革命の意義は、単に民主化に成功したというだけではなく、市民を中心に民主的な手法で民主化が試行錯誤されたという過程にこそ真の価値があるように思われる。その点から見れば、同書は、チュニジアの政変と民主化について、単に図式的な政治分析をするのではなく、そこに生きたチュニジア

の人びとの声や思いを交えつつ、多様な側面から政変と民主化の過程を描きだしており、プロセス・ドキュメンテーションの手法による研究の意義は非常に大きいといえよう。

同書の構成

同書の構成は、以下の通りである。

「序章 なぜチュニジア革命か」では、プロセス・ドキュメンテーションの手法の意義を含めた同書の内容が説明されている。

「第1章 「二つのチュニジア」と革命の背景」では、チュニジア革命の背景として、独立後の開発政策と地域格差の問題、ベンアリー大統領一族による縁故主義や不正蓄財の問題、さらには権力維持のための警察国家体制や投獄・拷問の実態などが描かれている。とくに、豊かな地域と貧しい地域、権力層と庶民層など、分断された「二つのチュニジア」の状況が革命の背景として示唆されている。また、2008年に発生したガフサでのリン鉱山民衆蜂起事件に注目し、革命が突然現れたものではなく、その予兆がすでに見られていた点が明らかにされている。

「第2章 チュニジア革命の始まりとベンアリー政権の崩壊」では、2010年12月のシーディ・ブーズィードでの野菜売りの青年による現体制への抗議を込めた焼身自殺から、民衆デモが国内各地に広がっていき、警察の弾圧にもかかわらず、最終的にベンアリー政権が崩壊するまでの過程が描かれている。また、その過程において市民団体が重要な役割を果たしていたことが明らかにされている。

「第3章 革命後の民主化移行と制憲議会選挙でのナフダ党の勝利」では、独裁政権崩壊後の臨時政権への移行期について、民主化を求める「自由のキャラバン」の抗議運動など市民運動に触れながら、2011年10月の制憲議会選挙でイスラミスト政党のナフダ党が第1党になる

までの過程が描かれている。

「第4章 ナフダ党連立トロイカ政権からカルテット仲介の「国民対話」へ」では、ナフダ党が他の二党と連立を組み、トロイカ政権を発足させた後、イスラミスト勢力とリベラル勢力の深刻な対立が引き起こっていく過程が描かれ、その危機に対し、カルテットと呼ばれる労働組合（UGTT）、人権擁護連盟（LTDH）、全国弁護士会（ONA）、産業商業手工業連合（UTICA）が「国民対話」を粘り強く進めた点が明らかにされている。

「第5章 女性たちの活発な政治社会活動」では、革命期と革命後における女性の政治社会参加が描かれている。その特徴は、革命前の「国家フェミニズム」から革命期の「市民フェミニズム」への発展であったと指摘されている。

「第6章 新憲法制定と自由選挙に基づく新政権の発足」では、新憲法の制定と新政権の発足、また、その後に国内各地で発生したテロ事件とその対応、また、革命後の国内観光業などの経済状況について描かれている。

「第7章 市民社会の力とトランスナショナルな連携」では、革命後の NGO 活動の活性化が指摘され、政治・経済・社会面において、市民団体が大きな役割を果たしてきた点が明らかにされている。

「終章 チュニジア革命の意義と今後の展望」では、同書の内容がまとめられ、特に、チュニジア革命の特徴として、第一に、革命後にも国家の合法性が存続した点、第二に、民主化移行過程での武力行使が少なかった点、第三に、市民の活動や関与が極めて活発であった点、第四に、同過程において女性たちの活躍が顕著であった点、第五に、国際的な支援はあったものの、外国からの直接的な干渉や介入がなかった点が挙げられている。また、チュニジアの今後の課題として、テロとの闘いと経済立て直しが挙げ

られており、国際的な支援の必要性も指摘されている。

なお、繰り返しになるが、同書は、民主化過程について詳細な記述をしているだけでなく、さまざまな局面における市民の証言を精力的な聞き取り調査によって拾い上げている点に大きな特徴がある。それにより、ステレオタイプな革命理解を避けるとともに、今回の革命の意義を市民の視点から捉え直すことも可能にしている。さらには、革命後のテロ事件や経済状況、文化運動などに対する市民のさまざまな声は、今後のチュニジアの展望を考える上で貴重な資料になっている。

非暴力闘争としてのチュニジア革命

ここでは、評者自身の問題意識から、同書の意義を考えてみたい。

同書で描かれているとおり、チュニジアの政変と民主化は、その過程で市民や市民団体が大きな役割を果たし、決定的な武力衝突は起きなかった点に特徴がある。

この過程は、現代のアメリカの政治学者ジーン・シャープによる非暴力闘争論と親和性が高いと考えられる。シャープは、マハトマ・ガンジーの非暴力闘争の手法を、独裁体制から民主化体制への移行に応用すべく、実践的な研究を進めた人物である。

以下、簡単に、シャープが提示する非暴力闘争の手法について整理しておこう。

シャープは、『独裁体制から民主主義へ』（ちくま学芸文庫）（瀧口範子訳、筑摩書房、2012年）において、非暴力闘争論の視点から、いかにして暴力衝突を避けつつ、独裁体制を打倒することができるのかについて研究と提言を行なっている。

シャープによれば、独裁体制に対して、ゲリラ戦や軍事クーデターによる闘争手段では、軍

事的衝突によって市民への被害が大きくなるばかりでなく、たとえ独裁体制の打倒に成功したとしても、エリートや軍部と民衆との間に権力の不均衡な分配を生み、その後に独裁的・非民主的な新体制を生んでしまう危険性が高いという。そのため、むしろ、非暴力闘争を徹底することが独裁体制を打倒し、民主化を実現するための成功の鍵だという。すなわち、非暴力闘争は、単に望ましいというだけでなく、実践的に不可欠な戦術ということになる。

シャープは、非暴力闘争の戦略と有効性について以下のように説明している。

まず、独裁体制に限らず、秩序を支える政治的な力の源泉とは、①権威、②（統治者に従う）人的資源、③（統治に必要な）技能と知識、④（民衆を誘導する）無形の要素、⑤（統治者が管理できる）物的資源、⑥（不服従者に対する）制裁だという。

そして、こうした力の源泉は、権力者が固有に持っているものではなく、実は、民衆が統治者に自発的に提供して初めて存在するという。シャープは、「この政治的な力の源はすべて、民衆側が政権を受け入れ、降伏し、従順することによっており、また社会の無数の人々や多機関の協力によって成り立っている」と説明している。

シャープは、この権力構造の見方について、ガンジーの思想や運動とともに、16世紀のフランス人思想家エティエンヌ・ド・ラ・ポエシが、『自発的隷従論』において、王政（絶対王政）は支配される側の隷従によって永続するとした権力論に共通性を見いだしている。

そうであるならば、独裁体制を打倒するには、武力闘争を経なくても、この権力の源泉を攻撃すれば良いということになる。シャープは、「民衆や機関が侵略者や独裁者に協力しなくなれば、どんな統治者であっても依存している力の

源は枯れていき、時には断たれる。そうした源を失うと、統治者の力は弱体化し、ついには消滅するのだ」と指摘する。

具体的な闘争手段としては、①抗議行動と説得（声明の発表やパレード、座り込み、象徴的行動など）、②非協力（ボイコットやストライキなどの社会的・経済的・政治的非協力）、③非暴力的介入（非暴力的占拠や並立政府樹立など）である。

つまり、独裁政権に対して、反対の意思表示を行い、統治に協力せず、さらには積極的な反政府行動を起こすという三つの手段を状況に応じて組み合わせながら非暴力闘争を進めていくことが肝要となる。繰り返すが、その際に抵抗勢力による暴力が起これば、逆に、独裁者にとって有利な武力闘争となってしまうため、あくまでも非暴力を貫くことが成功の鍵となる。一方的に独裁者側が暴力的な挑発や行動にでたとしても、それは、逆に、権力の源泉である権威を失墜させる結果となり、長期的に見れば、独裁体制の弱体化や崩壊につながるのである。

こうした議論は、一見すると、現実的ではない理想論であるように思われるかもしれない。しかし、シャープは、東ヨーロッパやアジアなど長期の独裁体制の下にあった多くの国が、平和的手段で、数日、数週間、数ヶ月のうちに国民の自由を回復したケースがあったことを指摘する。シャープがこの本を書いた時点では、まだチュニジア革命は起きていなかったが、シャープの議論は、まるでチュニジアのベンアリー政権の崩壊を予期しているかのようにも読み取れる。

もちろん、独裁体制に対する非暴力闘争を一般的な視点から検討するシャープの議論とチュニジアの固有性との間の共通性や差異については慎重な検討が必要であろう。なお、この点については、シャープの非暴力闘争論についての

研究者でもある三石善吉氏が『武器なき闘い「アラブの春」』（阿吽社、2014年）のなかで一部検討しているが、さらに詳しい分析を進める上で、鷹木氏の『チュニジア革命と民主化』は大きな貢献をするものと考えられる。同書は、チュニジアの政変と民主化過程における市民による非暴力闘争の実態について詳細に記述し、その活動がもたらした成果と実践者たちの声を記録しているからである。

おわりに

最後に、個人的な経験と感想で恐縮であるが、評者は、同書を読みつつ、チュニジアの友人たちの顔が思い浮かんだ。そして、同書に内在されているチュニジアの人びとの思いや行間から読み取れる著者の鷹木氏の思いに心を動かされた。評者自身にとって、忘れがたい読書体験となった。

同書のあとがきに書かれている鷹木氏に宛てたチュニジア人青年のメッセージをぜひご覧いただきたい。鷹木氏が長年チュニジアで誠実な研究を進めてきたことが、今回の研究に結実していることが読み取れるであろう。冷静な頭脳と温かい心と言おうか、その地域の人びとに寄り添いつつ、客観性を失わずに調査・研究を進め、独創的な成果を発表するという地域研究者としての真髓が同書には現れているように思われる。